

第2課

神はいるか

不可知論は、神が人間をつくったのではなく、人間が神をつくったのだ、と言います。宗教を人間の投影と見るのは社会学的宗教観です。

しかし、別の見方もあります。1つの枠組みの中で人間の投影に見えることが、別の枠組みの中では「神の現実」の反射に見えることがあるかもしれません。オーストリア生まれ（現在はアメリカ人）の社会学の教授ピーター・バーガーは、人間の状況内における「超越の信号」ということを言っています。この表現で、彼は「われわれの自然領域内に見いだされるものであるが、その現実を超えた点を指し示しているかに見える現象」のことを言っています。（バーガー P.26）。このような現象は、ふつうの日常生活において知ることのできるものです。

彼があげているそのような超越の信号に、どの人間文化にも見いだすことができる「遊び」の要素があります。遊びは時間を超えさせ、瞬間を超越した解放と平安をもたらします。たとえば、公園で物真似ごっこをして夢中で遊んでいる子供たちは時間を忘れています。

ベルガーは、彼の育ったビエナの町の第二次世界大戦の記憶から、この超越の経験を語っています。ソヴィエトの軍隊が1945年にビエナ市を占領する直前、ビエナ交響楽団は定期演奏会を開いていました。侵攻が始まり、ソヴィエト部隊の侵入によって演奏会のスケジュールはおよそ一週間妨げられ、その後予定通り演奏が続けられました。侵略があり、帝国の崩壊があり、それに代わる帝国の出現がある中で、演奏会はほんの少し中断されただけでした。このようなことがどうして起こりえたのでしょうか。ベルガーは言っています。「それは崩壊の意思表示に対する、さらに戦争と死の醜悪さに対する全人類の創造的美の究極的勝利を断言したものである」（P.78）。演奏の現実の中に超越の信号があり、それは人間の性質を超えた一段と高い義を指し示しています。

このような信号は「信仰」に関係があります。というのは、信仰は隠れたわ

ずかの人たちだけに開かれる神秘的啓示に根ざしているのではなく、私たちが日常生活で経験することに根ざしているからです。私たちの人間経験の全体は「希望」に方向づけられています。あらゆる面で死に囲まれている私たちの世界で、死に対する確かな「否！」が立ち上がり、それと共に、それ以上のものがあるという感情を伴います。このような感情はどこからくるのでしょうか。この超越の信号、ないしはより高い義は神から来ていると言えないでしょうか。神はいるのでしょうか。もしそうなら、神はどのような神でしょうか。これらの重要な質問はこの課の主題となっています。

アウトライン

- 無神論と不可知論
- 神の証明問題
- ア・ポステリオリの証拠
- ア・プリオリの証拠
- 価値論からの証拠
- 〔それ〕としての神でなく〔彼〕としての神
- 排戦

考えるための問題

1. 無神論者と不可知論者の違いは何ですか。
2. 神の存在は、水は水素2と酸素1によってつくられることを証明できるのと同じ方法で証明できるでしょうか。
3. 神への〔指示〕として、ア・ポステリオリの推論はどのように用いられますか。
4. 「宇宙論的議論」と「目的論的議論」との概念の微妙な違いは何ですか。
5. 神への〔指示〕として、ア・プリオリの推論はどのように用いられますか。
6. 本体論的議論とはどういうものですか。
7. 道徳と美からの議論は、人格的な神への効果的〔指示〕に役立ちますか。
8. 神は〔それ〕でなく〔彼〕と呼ばれるべきですか。
9. あなたは神の現実をこの存在に直接語ること（祈ること）によって試してみましたか。

用語の意味

- 不可知論 — いかなる究極的实在（神としての）も知られないし、またおそらく知られえないであろうという信仰。
- ア・ポステリオリ — [あとから] という言葉。観察される事実から推論して引き出された結論。（経験的）
- ア・プリオリ — [まえから] という言葉。原因から結果に進むこと。演繹的推論。自明の前提から推論して引き出された結論。経験によって前提となっていたもの。（先験的）
- 無神論 — 神の存在の否定，神はいないという教え。
- 宇宙論的 — 秩序ある体系としての宇宙を取り扱うもの。宇宙の起源，構造，空間との関係を扱うもの。
- 本体論的 — 存在の特質と諸関係に関わること。
- 目的論的 — 自然における意図や目的の証拠を研究することに関係すること。自然に属する性格，あるいは目的に向かいつつあるか，目的に形づくられつつある自然的過程の研究。

学課の展開

個人的問題や緊張した感情的経験によって、人間のうちにあるあらゆる喜びや希望が消し去られてしまうことがあります。非常にこみ入った合理化の手続きを経て、このような問題に苦しむ人は無神論の立場をとることがあります。オーロ・ストラック博士はこのような経過を「神経症の無神論」と名づけています。彼は以前、マルキシストで現在ローマ・カトリックの精神療法医であるイグナス・レップ氏の著書から引用して、「無神論に走った少女」のことを語っています。

「リサは実存主義者の哲学の影響を受けて神への信仰を捨てた。彼女はキリスト教はまったく無意味であり、人生は腐って不条理であると感じ、従って彼女にはどんな快樂も気まぐれも避ける理由がなかった。彼女は自慢してアルバート・カミュやジーン・ポール・サルトル^aの作品を引用し、自分の態度を正当化した。

しかし、彼女が実存主義的無神論に転向したのは、いわゆるこの「知的証拠」のためだけではなかった。リサはあるむずかしい情緒的・道徳的な傷を負っていたのである。彼女は著名な男と出会って、彼の主婦になった。2、3ヶ月して彼は彼女に飽き、まったく幻滅を感じて彼女のもとを去った。そのような高名な男も実は悪党にすぎなかったとしたら、この世に神聖なものなどありえようかと、彼女は疑問をもった。カミュとサルトルの本を読みながら、彼女は自己の人生の絶望を哲学的に確信しようとした。ついに彼女は、反社会的反抗の挙に出るまでになった。異常な身なり、小さな犯罪、そして殺人まで関わるようになった。

リサの人生は、神もなく、意味も、目的も、未来もない絶望の人生でした。状況は悲惨ですが、誇張されたものではありません。もっと悲惨なことは、多

くの青年がリサと同じであるかもしれないということです。あなたもそうかもしれないかもしれません。もしそうなら、あきらめないで下さい。「希望」があるのです。また、人生の問題に対する「正しい答え」があるのです。

無神論と不可知論

無神論

無神論者の最も簡単な定義は文字通り、「神はいないと信じている人」です。もしあなたが、どんな種類の神も存在していないと確信しているなら、またもしあなたの考えが固まっているなら、これからの学課を進めてもほとんど役に立ちません。しかし、もしあなたが小さな声で無神論を弁護し、あるいは知的、霊的構えとしての無神論に満足していないとすれば、読み続けて、今日の世界における神の实在の証拠を考えて下さい。

マルチン・ルター（1483-1546）は、しばしば宗教改革の父と呼ばれましたが、「神は我々が心をよせるものである」と言いました。もしそれが権力か、科学、革命、金、地位、その他無数のことであるなら、私たちはみな何かに心をよせており、それにどこまでも忠実です。この意味で、だれでも少なくとも1つのことに「心をよせて」いるので、真の無神論は不可能です。この1つのことが私たちの神になります。

不可知論

私たちの時代のような科学技術の時代には、不可知論は人の興味を引く魅力的な立場に見えます。不可知論は、「神を知ることには限界があり不可能である。換言すると、神の存在を肯定することも否定することもできないとする見解」です（テトス P.240）。このような無無限の答えられない立場は、本当に謙遜な立場であるような印象を与えますが、実際は陰湿な立場です。もしあなたがこういう考えをもって、心から「私にはわからない」と言われるのなら、これからのページをあなたの思い（知性）を使うだけでなく、心（意志）をも用いてよく考えられるようにおすすめします。

感性の鋭い青年が、20世紀の複雑な問題を知って、「奇跡の探求」と題する詩を書いて、有名な牧師に送りました。その詩には、「これが実現することを望みます」と書かれた文が添えられていました。これがこの人にとって実現したかどうかは知りませんが、これは実現可能であることだけは言えます。ここにこの詩をあげますので、よく考えながら読んで下さい。

私は人生に奇跡を捜している。

私はある人を捜している。その人は

罪を責めない

ありのままの私を受け入れてくれる

あらゆる争いを終わらせてくれる

私が自由になることを願う

私はある人を捜している。その人は

心から心配してくれる

大胆になりたいと思わせてくれる

私に現実を与えてくれる

末踏の地を歩ませてくれる

すべての人が神と呼べるそういう人を

私は捜し求めている

神証明の問題

著名なアメリカの新聞記者ルイズ・カッセルズは神の存在を証明する問題に直面しました。彼は言っています。

「神の現実証明できるだろうか。即座に単刀直入の答えを言えば、それはできる。しかし、それはあなた自身にしか証明できない。だれもあなたに証

明することはできない。なるほど神はいるらしいと理性的に信じさせるような多くの論理的論議があるが、究極的にあなたの疑いを解ける唯一の証明は、あなた自身で神の存在を経験することだ」(カッセルズ P.6)。

単に知的な観点から神を証明することは不可能であるというルイズ・カッセルズと私は同意見ですが、それでもなお、「神はいる」という方向で人を考えさせることのできるような多くの力強い、受け入れざるをえないような「指示」のあることも確かです。

神の存在の証拠を論ずる際に、私はあまり聖書を証拠資料として使いません。これには2つの大切な理由があります。

まず第1に、神の存在は聖書の前提であるということです。聖書は「はじめに神は……」(創世記1:1)という神の活動の単純な断言で始まり、全巻を通じて、神の存在は当然のこととして受け入れられています。ある神学者が次のように言っている通りです。「神の存在を証明するとか論じようとする試みは、旧約と新約の著者のだれもが抱かなかったように見える。どこでも、またいつの時代でもそれは当然の事実である」(シーセン P.56)。

第2に、キリスト教の主張を調べている人や神の存在を疑って苦しんでいる人は、聖書が言っている以外の他の証拠を求めるとのことです。彼らは聖書の権威を疑っています。ですから、私たちは神の存在に対する合理的論理的証拠を考察するのです。

ア・ポステリオリの証拠

ア・ポステリオリの論証は観察された事実からの論証です。それは結果を見

て、原因に戻ります。それは原因を観察された結果の上に置きます。

人間の歴史上最大の知性の1人と考えられているトマス・アクイナス(1225-1274)は、神の存在を証明しうる有名な「キューインクエ・ヴィア」(5つの方法)を提案しました。この資料は、長い間有神論的文学の古典と見なされてきました。今日、これらの神への指示に新たな関心が寄せられているのは興味深いことです。

これらの「有神論的証明」は、当初、アクイナスによって思索する人に向けて書かれたもので、「神の存在を信じないことよりも信じることの方がなぜ聡明か」という理由を示すものでした(レイドP.162)。

運動

「動かされるものは、すべて他の何かによって動かされなくてはならない」。このような運動は無限の過程ではないので、究極的には「他の何ものによっても動かされない第1の運動の源」に戻りつくことになり、「このような源をすべての人は神と理解している」。

これは、アクイナス自身の言葉で言うと、動かされない運動を起こすというアリストテレスの脱キリスト教概念と同じ思想です。自然における本質と運動を分析したあとで、アリストテレスは第1運動者、もしくは第1原因は存在しなければならないという結論に達しました。彼のこの結論を調べてみると、彼は自然を通して神の存在を知るに至り、すべての自然はその存在を神に依存していると確信するに至ったことがわかります。この第1原因なくして、存在してきたものは何一つとしてありません。

因果律

何物もそれ自体が原因であることは不可能です。原因が限りなくさかのぼることは、不可能であり矛盾しています。どこかに第1原因がなくてはなりません。「故に我々はある第1の原因を仮定する。そしてすべての人はこれを神と呼ぶ」

実際のところ、これはアクイナスの運動概念に何もつけ加えていませんが、運動と因果律が一緒になって、いわゆる「宇宙論的論議」を構成するようになる多様な論議です。この論議は13世紀にアクイナスによって最初につくられて以来、わずかの著者や科学者を除いて少しも反論されませんでした。

可能性と必要性

アクイナスの第3の論議は可能性と必要性からとられたもので、それは次のようなものです。私たちは経験によって、すべてのものは相互に依存し合っており、事実各自はその存在を相互に依存していることに考えつきます。物質は存在することも存在しないことも可能です。現にあることもないことも可能です。しかし、すべてのものが常に存在することは不可能です。だが、もしすべてのものが存在しないことがありえるとしたら、同時に存在するものは何一つありえなかったかもしれません。しかし、これは非論理的です。なぜならば、無からは何も出てこないからです。そうすると、存在が必要な何かが無くてはなりません。必要性によって常に存在していたものは、「すべての者が神として語っている」ものです。神以外のすべてのものは、存在するためには他の何かに依存しています。

存在の段階的变化

完成の段階は宇宙に存在しています。「種々の存在の中には、善、真、高貴、その他のことで上下の差がある」。これらの存在は、「すべてのもののうち最も偉大なものに近づくいろいろな度合に応じて」良いとか良くないとか言わ

れます。言いかえると、宇宙にはそれ自体完全で「我々が神と呼んでいる」ところの比較の基準が存在しています。

世界の統治

これはより一般には目的論的論議とか意図からの論議で知られています。宇宙の秩序と配置は、その背後に知性と目的の存在を暗示します。「物質」は存在するが「知ること」はしません。にもかかわらず、物質は偶然によってではなく、設計、意図によって目的を遂げます。この意図はそれ自体で存在するものではないので、ある知的な存在、「それによってすべての自然界の物質が目的に方向づけられるもの、すなわち、我々が神と呼んでいる知的存在」のうちに見い出されなければなりません。

トマス・アクイナスの「5つの方法」は、相互に関係している5つの独立した論議、あるいは5つの面をもつ1つの証明と考えられるかも知れません。キリスト教哲学者の中には、これらの論議の全体は1つの論議と見るべきであり、これこそアクイナスの最初の意図であったと言う者もいます。私は、アクイナスの論証の筋道にはいくつかの欠点があり、彼の考え方を攻撃した人たちもいたことを認めます。しかし、またこの論議は全体として見るとき累積的結果を生み出すことも確かです。この論議は確かに聡明で自由な、そして永遠で測り知れないほど偉大である存在、あるいは第1原因者を示す「指示」の役目を果たすものです。これらの「証明」の基本的な欠点は、それらは人格と愛をもつ神、人間と世界に応える神のことを説明しないということです。しかし、これについてはあとで見ることになります。

ア・プリオリの証拠

ア・プリオリは、原因から結果に至る論証の形式を意味し、自明なことを知ること、観察や経験を離れて真理であると認めることを意味します。この意味で、神の存在のア・プリオリな論議は、すべての人間のうちには、超越している何者かへの責任を認めるものが深く存在している、と告げます。

本体論的論議

本体論的（オントロジカル）という言葉は、「存在」を意味するギリシャ語のオントスから来ています。中世の時代に、カンタベリーの聖アンセルムス（1033-1109）という非常に独創的な思想家である聖職者がこの論議をまとめました。

アンセルムスは、「愚かな者はその心に神はない」（詩篇14：1）という聖句から始めました。アンセルムスにとって、人は神以上に偉大な存在を考えることはできませんでした。人間は絶対的真理の存在を信じる「知る」中心です。すべての人に神を知る能力が備わっています。これをもとに、彼は「最も偉大な考えうる存在である、神の概念そのものの中に神の存在を証明」しようとしてきました。

アンセルムスの言葉は、神の存在を証明していませんが、神は存在しているに違いないこと、また神は、無限で完全であることを示しています。神は最も真実で高い意味の存在です。神の存在は証明されませんでした。私たちの知力^dはそれ以外のことを考えることを私たちにゆるしません。

生来の神概念

生来の神概念という概念は、本体論的論議と同じものです。その最も単純な形において、その観念はあらゆる人がその心に神の概念を植えつけられて生まれてくると言います。人間は年をとるにつれて、神概念もはっきりし、強くなってきます。この印象から、神はいるに違いないという観念が生まれます。

さて人間がもつ概念は、非常にはっきりしている場合とわずかに意識のはしにのぼる場合とがありますが、危機的な時にそれは突然生きてきます。

別の言い方をすると、人は「生まれながらの」宗教的性質や意志、思考といった究極的な能力を持っています。現代のプロテスタント神学者ヘンリー・シーセンは、神の存在を知ることは<直観的>なものであることを信じる信仰を支持しています。彼は「聖書も歴史も神への信仰は普遍的であることを証明する」と言っています（シーセン P.55）。

歴史と人類学は、人間の性質の宗教的要素は合理的、社会的要素と同様、普遍的であることを具体的に示しています。「この至高の存在は、実際にどこでも同じ形、同じ強さでというわけではないが、原始的文化をもつすべての人の中に見いだされる。それは今なお求めるところで、この支配的立場を確実なものにするほど顕著にあらわれている」（同）。

人間の有限性

私たちは、絶えず私たちの限界を思い知らされます。アリストテレスによると、人間は自分が有限な存在であることを知ります。「人間は自己の有限性の感覚をもっています」（ラム P.90）。

今世紀に、人間のもろさが大いに意識されてきました。私たちは悲観主義の時代に生きています。戦争の恐怖、核による絶滅の脅威、人間に対する人間の非人間化のその他の形態は、人々に現代人の知恵と良識を疑わせてきました。ある現代の文学は人間の有限性を強調しています。

虚無感（ニヒリズム）^eは現代の多くの人々、時に若い世代の心をとらえているように思われます。

人間が自己を小さく、孤独であると感じるときに、彼を超えたある源からの力と慰めと支えを求めるとはしないのでしょうか。人間が無限の存在、神に直面するのは、彼が深く自己の有限性を感じる時です。ある神学者は、すべての人の中に「依存感」のあることを認めています。次の段階は、無限者なる神は人が依存できる、また依存しなければならないおかたであることを認めることです。

価値論からの証拠

価値論は、「価値の研究」を意味する哲学用語です。価値論からの証拠には、神の存在を示す重要な指示として2つの意味深い領域があります。両者は人間のうちにある価値認識から生まれてきます。最初は道徳的価値を扱い、2番目は美的価値に関係するものです。

道徳的論議

ドイツの哲学者インマヌエル・カント（1724-1804）は、トマス・アクイナスの5つの方法は空論で、道徳的存在者としての神のいかなる知識をも証明していない、と信じていました。そこで「良心」に基づいて、彼は、自由と不滅と共に神の存在を論じています。

C・S・ルイス（1898-1963）^gとかカール・ユング（1875-1961）^hのような偉大な知性の持ち主も、すべての人は歴史と人類学に知られたあらゆる民族、年代、文化に存在していた「道徳的感覚」を持っていることを信じていました。ロゴセラピー概念の創設者である、偉大なウィーン精神分析医ヴィクトル・フランクル（1905- ）は、最も基本的な人間の必要の1つは「意味への意志」である、と信じています。人間は、ほとんどどのような苦難にもその目的

がわかりさえすれば耐えることができる、と彼は言っています。反面、人間は、もし人生を意義深くする何か大きな力に自己の人生を関連づけることができないと、富の真只中でさえも悲惨な状態になります。

組織神学者のオーガス・ストロングは述べています。

「良心は至高の権威をもつ道德律の存在を認める。この道德律の既知の違反は、無価値の感情と審判の恐れに伴うものである。道德律は、自己で自己に課するものではないから、またこれらの審判の脅威は、自己で自己に行使するものでないから律法を課している聖なる意志の存在と、道德的性質の脅威を行使する刑罰を与える力の存在を各々主張している」(ストロング P.82)

言いかえると、「良心は偉大な律法の賦与者である神の存在と、神の律法を犯すすべての違反に対する刑罰の確かさを認めているのです」(シーセン P.62)。

美的論議

美的論議は美の感覚が人間に普遍的に存在しているとの推定に始まります。宇宙の崇高なもの、美しいものは「人格的」神の存在の直接的証拠と見られます。たとえば、自然の中には、花、太陽、木の間に色彩の不一致はありません。人間の形、動物の生活、海には調和と美があります。

人間が美的能力をもって周囲の美を認識し、鑑賞することができるという事実は、この普遍的な美的価値の強力な証拠です。「美」と言われていること概念は、文化の違いによって変化するかもしれませんが、これが本質ではありません。本質は、だれでも普通の人間であれば、そのうちに、美の感覚、魅力的なものに判断を下す能力があるという点です。さらに、人間には、自分自身で美を創造する能力と技術、たとえば芸術、交響楽、歌、詩、建築物といった面があります。

なぜ、世界の美と人間の美的能力と鑑賞力がそれほどうまく一致するのでしょうか。それはデザイン（意図）によるものであるにちがひありません。意図は知的能力を暗示し、知的能力は人格を予想します。このことは私たちを再び神につれ戻します。

〈それ〉ではなく〈彼〉としての神

信仰体系は、説得され論証されることによってではなく、受け入れる態勢のある人によって受け入れられる傾向があります。たとえば、この課の始めにあげられたリサの苦境に戻ってみましょう。彼女は無神論者であることを認めました。もし彼女が、神の存在に対する公理的な証拠に直面していたら、どういう結果になっていたか、私たちにはよくわかります。どんなに論理的な論議が明らかに示されたとしても、リサは、それらを受け入れるのにふさわしい心の状態ではなかったのです。

合理的な思考がなしうる最善のことは、神の存在を示す一連の（指示）を示すことです。そのうちのいくつかを、また、すべてを受け入れることができたとしても、せいぜい第1原因、至高の存在、偉大な知性を洞察したにすぎません。これは信仰の行為ではなく、意味のある方法で提示された明確な証拠による論理的仮説への知的同意にすぎません。

今まで、前述の詩は別として、私たちは神は人格的属性をもった存在というよりも（それ）であることをほのめかしてきました。特に、もし何も理由があげられない場合は、知らないうちに神に対して固有名詞が使われてきた変化をあなたは直ちにつかむことでしょう。しかし、神は、「それ」よりも「彼」であることを知ることは必要です。

時間と空間の創始者は、明らかに私たちのように時間と空間に制限されません。神はあらゆる人間の範疇を超越しています。しかし、このすべてが語られるとき、神を「彼」として語ることのほうが自然となるでしょう。ルイズ・カッセルズはこの点をこう言っています。

「われわれは固有名詞を用いて神に言及する。なぜならばわれわれには生ける存在、思考する存在、目的をもった存在の属性である人格があるからである。それは、われわれの理性で観察しうる創造された宇宙の最も高度で複雑な現象である。「あらゆる存在の根拠^k」として、神はわれわれが人格性を究極的に考えようとする場合の思考を、無限に超えている存在である。彼は確かに生ける人格以下の存在ではない。それ故に、われわれが神を「彼」と言うのは、われわれが神を人間学的に考えているからではなく、われわれが有する固有名詞で最も不適切でないためである」（カッセルズ P.10）。

ロンドンの大学の物理学教授であり、英国科学普及会の天文学教授でもある英国の科学者ロバート・L・F・ボイド教授は、神が人格である点を理解する上で私たちに助けを与えてくれます。彼は3種類の知識——数学的知識、科学的知識、人格的知識を論じています（ボイド P.10-11）。

純粋数学において、知る側は孤立しています。彼の知識は彼が造った公理の結果です。公理が自然界に関わるまでは、数学は不毛です。そこには単に「われとそれ以外に何も無い」関係があるだけです。もっとも、そのような関係を関係と呼べればの話ですが。

一方、科学的知識はデータを外部に、すなわち物質界に求めます。これが世界の新しい知識となります。科学者は立って現象を観察しますが、現象のほうは、ふり返ったり応答したりすることはしません。彼は最高の立場に立ち、「われとそれ」関係をとっています。

人格的知識を獲得する主たる手段は「出会い」によるものです。これは経験的知識とも呼ばれます。経験による知識は時にはもっと広く定義されますが、私は「われと汝」という表現をその関係に用いています。観察は純粹な出会いと精神の交流との代わりになりません。人格的出会いは自己啓示を含み、自己をあらわす「われと汝」の関係を含んでいます。

この3番目の知識の範疇に、私たちは神を「それ」よりも「彼」として見ます。1,000年以上も前に聖アウグスチヌスが言っている通りです。「あなたは私たちを、ご自身に向けてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです」(告白、第1巻第1章)。

挑戦

聖書のアプローチ全体は、聖書が人格をもつ愛の神の存在を前提としている点で、これまで論じてきたものとは違っています。しかし、別の相違もあるのです。聖書は人間が神を探求していることよりも神が人間を探求していることを記録しています。神が存在することを確信し、あとはひとつ別の哲学的問題を解いたと思って、神とは無関係に生活するだけでは十分ではありません。

これまで言及してきたあらゆる点にもかかわらず、問題は論理的推論で神の存在を「証明する」ことではありません。むしろ神が私たちのために行動され、ご自身を知らされたことが問題なのです。

神は確かに存在します。第1原因、動かされない運動者、すべての存在の根拠、あなたが用いたければ他のどんな哲学的用語を用いても結構です。しかし、大切なことは、彼は歴史を通じて人間の状況に語りかけ、行動してきた人格であるという点です。彼は最初アブラハムに語り、旧約聖書が記録しているように、それから彼の預言者を通して語ってきました。そして最後には、それ以上は不可能という最高の方法で、彼は御子イエス・キリストの受肉によって語りました。

この課を終えるにあたって、私はあなたが神に直面するようにあなたにチャレンジしたいと思います。神の存在をためしてみてください。私は、一方で神についての疑いで苦闘していたひとりの正直な学生が次のように祈ったのを聞きました。「神よ、もし神がいるなら、あなたがわかるように、あなたを知ることができるよう助けて下さい。あなたに愛があるなら、私を愛して下さい。私を必要としているなら、私のところに来て下さい。アーメン」。

あなたはきっと神について多くの友人と語ったことがあるでしょう。きっと

この課を自分にあてはめてみたことでしょうか。あなたはおそらくこの重要な問題をしばしば思案し、考えてきたことでしょうか。もう一歩進んで、自分自身で神に語りかけて下さい。その瞬間に神がとても近くにいることが感じられないにしても、親友に話しかけるように彼に話してみてください。そうすれば、あなたは「冷たい証明」のレベルから、「われと汝」という人格的出会いの領域に飛躍するでしょう。

あなたが始める場所が必要だと感じるなら、前に引用した同じ祈りの詩をくり返すとよいでしょう。あるいは、以下のような言葉で神に語ってみてはどうでしょう。

人はひとつの存在を恐れ

ひとつの存在を敬うことができる。

しかし、人は父なる神を愛する

ご自身が愛そのものであるお方を。

父よ、あなたに対する

このような無条件の愛を私に下さい。

他の人が自分の神々をつくり出そう

とするなら

私にとってそうならないようにして

下さい (ゲッシュ P.60)。

引用参考書——第2課

- 1 . Berger, Peter L. *A Rumor of Angels*. (天使の噂) Middlesex, England: Penguin Books Inc., 1970,
- 2 . Boyd, Robert F. L. *Can God be known?* (神を知ることができるか) London, England: Inter-Varsity Press, 1970.
- 3 . Cassels, Louis, *Christian Primer*. (キリスト教の初歩) Garden City, New York, USA: Doubleday and Company, Inc., 1964.
- 4 . Fremantle, Anne. *The Age of Belief*. (信仰の時代) New York, New York, USA: The New American Library, 1954.
- 5 . Gesch, Roy G. *Help! I'm in College*. (助けて下さい。私は大学にいます) St. Louis, Missouri, USA: Concordia Publishing House, 1969.
- 6 . Lepp, Ignace. *Atheism In Our Time*. (われわれの時代の無神論) New York, New York, USA: The Macmillan Company, 1968.
- 7 . Ramm, Bernard L. *The God Who Makes a Difference*. (違いを生じさせる神) Waco, Texas, USA: Word Books, Publisher, 1972.
- 8 . Reid, J. K. S. *Christian Apologetics*. (キリスト教弁証論) London, England: Hodder and Stoughton, 1969.
- 9 . Strong, Augustus H. *Systematic Theology*. (組織神学) Old Tappan, New Jersey, USA: Fleming H. Revell Company, 1970.

-
10. Thiessen, Henry Clarence. *Introductory Lectures in Systematic Theology*. (組織神学緒論) Grand Rapids, Michigan, USA: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1956.
 11. Titus, Harold H. *Living Issues in Philosophy*. (哲学の問題点) London, England: Van Nostrand Reinhold Company, 1970.

今後の学びのために

Bierman, A. K. and Gould, James A. *Philosophy For A New Generation*. (新世代の哲学) London, England: The Macmillan Company, 1970

54, 55章は有益で興味深い哲学的本文と同時に、神の存在を合理的に論じている聖アンセルムスとトマス・アクイナスの実際の原文を含む。

Boyd, Robert F. L. *Can God be known?* (神を知ることができるか) London, England: Inter-Varsity Press, 1970.

この16ページの小冊子は、第1課で論じられた認識論の問題に関してすぐれている。3種類の知識について語っている点でこの課においても有益であった。

Brown, Colin. *Philosophy and the Christian Faith*. (哲学とキリスト教信仰) London, England: Tyndale Press, 1969.

1章で神の存在の古典的論議が論じられている。しかし、この本全体がキリスト教と哲学に関心をもっている人たちに最適である。

Cassels, Louis. *Christian Primer*. (キリスト教入門) Garden City, New York, USA: Doubleday and Company, Inc., 1964.

1章は特にこの課の主題をよく説明している。

Frankl, Viktor E. *Man's Search for Meaning*. (人間の意味探求) New York, New York, USA: Washington Square Press, 1963.

厳密な意味で宗教書ではないが、第2次世界大戦のナチ強制収容所の内部で知った、生きる支えとなる信仰に対する人間の必要の感動的直接的記録である。

Reid, J. K. S. *Christian Apologetics*. (キリスト教弁証論) London, England: Hodder and Stoughton, 1969.

第6章はこの課の主題、特に神の存在の合理的「証明」に関連している。

Strunk, Orlo, Jr. *The Choice Called Atheism*. (無神論の選択) Nashville, Tennessee, USA: Abingdon Press, 1968.

第1章が特に無神論と不可知論に関する第1課の部分にあてはまる。

Titus, Harold H. *Living Issues in Philosophy*. (哲学の問題点) London, England: Van Nostrand Reinhold Company, 1970.

この本には、このコースの第1課の主題である認識論に関する非常に良い箇所がある。また、この課の主題に関しても良い資料となる。価値論に関して19章、宗教に関しては24章を見るとよい。これは哲学用語の非常にすぐれた解説書ともなっている。

自 習

1 新約ロマ1：1—2：29を読みなさい。

人と神との関係について、1：18—25から何を学びますか。.....

.....

1：18—19と2：13—16中に、神の存在に対する道徳的論議のどのような根拠を見いだしますか。.....

.....

2 以下の見出しで提示された証拠の長所ないしは肯定的な面を簡単に書きなさい。

ア・ポステリオリ

ア・プリオリ

価値論

3 もし至高の存在があなたに意味をもつなら、そのような実在は人格的な属性をもち、人間に関わりあうことができると考えられますか。あなたの意見では、なぜそうなりますか。また、なぜそうではありませんか。

.....

4 人格的な出会い——「われと汝」の経験によって、神の実在を発見したいと思いませんか。.....

.....

5 あなたの最も深い思い、夢、疑問を言い表わすような神への祈りを短く書きなさい。.....

.....

自習のガイドライン

以下の解答は、あなたの考えた答えにあるべき内容を示唆したにすぎないことを忘れないように。

1 人間は神の啓示した真理を受け入れないことを故意に選んできました。この反逆の結果、今日の人間は神の怒りを見る状態に落ちこみました。しかし、それでもなお人間は神をあがめ、神に感謝する地点に戻っていません。18, 19節でパウロは、人間は良い正しいことを知ることができるし、知るべきである。なぜなら神はすべてのことを彼に明示しているから、と述べています。人間のうちには「道徳的感覚」ないしは「良心」が現存し、人間はそれらを無視する道を選びました。これは道徳的論議です。2章13—16節で、パウロは、善悪を示すのは書かれた律法ではなく「心に書かれた律法」と主張しています。人間には生来良心というものがあって、その良心によってさばかれ、「対立する思い」や与えられている良心に従わない者は罪ありと訴えられます。

2 ア・ポステリオリの神の存在証明は事実深く根ざしています。方法論は科学的方法のそれです。現実のものから始めて、原因を捜し求めます。

ア・プリオリ論議は人間のうちにある宗教的要素（人間の有限性も含む）の普遍性に訴えます。それは普遍的なものですから、妥当性のある土台をもたなければなりません。

価値論の論議も善悪概念の普遍性に訴えます。もし律法や道徳があらゆる文化、あらゆる時代に現存するとするなら、あるものがある人が人間のうちに律法や道徳感覚をつくらなければならないでしょう。

3 この答えは、あなたがどのように考えるかという立場によってまったく

違ってきます。神を人格的属性をもつ者として見る理由には「美的論議」であげたもの、カッセルズの言葉、ボイドの論議、あるいは単にあなたが属している宗教的文化が入ってくるでしょう。この立場をとることのできない理由には、何よりも神の存在に関する疑いがあげられるでしょう。

4 あなたの答え

5 あなたの答えですが、以下のことを含むでしょう。

- あなた自身についての気持ち、あなたの長所と短所、あなたの良い点と悪い点、物事をやりとげた喜び、無価値の感情。
- 人生と神、存在一般の意味と特にあなたの人生の意味、悪と悲惨の理由。
- この世とあなた自身の人生における未来への希望、あなたのことやあなた自身から価値あるものをつくり出したいという特別な渴望。
- 非常に一般的なもの（「私は私の人生に何をすべきかを知りたい」）か、非常に特別なもの（「私は安い場所に滞在したい」）とについて知りたいという必要、その必要が満たされたいという必要。
- あなたが感謝していること、よさを認め価値を認めるようになってきたもの、それらを失うと人生の目的を果たせなくなるようなもの。

自己採点復習

1 無神論者，不可知論者，クリスチャンは神の概念に対して別々の態度をとっている。各自に基本的な構え，訴え，欠点（論議のレベルで）がある。これらの論議はどのグループが用いるだろうか。論議の前に適切な番号を語群から選んで書き入れなさい。

- a 神を含めて何をも確かめることはできない。
 - b だれでも彼にとって「神」となる何かをもっている。
 - c 人は幸福な生活をおくるために神を必要としない。
 - d 神の存在はあらゆる疑いを除いて客観的に証明することはできない。
 - e 神を信じることは心理的弱点のしるしである。
 - f 愛のない宇宙で我々は孤独である。
 - g 神は個人的に神を経験することによってのみ証明されうる。
- 〈語群〉 1) 無神論者 2) 不可知論者 3) クリスチャン

思考の刺激：あなたの経験と人生の知識に照らして，これらの叙述の欠点は何ですか。

2 神の存在のア・ポステリオリ論議についての以下の文を完成しなさい。空欄に答えを書きこみなさい。

- a 「5つの方法」は.....によって考え出された。
- b 運動の法則は.....を指し示す。
- c 第1原因からの論議は.....論議である。
- d 完成の段階は.....の存在を示唆する。
- e 意図からの論議は.....論議である。
- f これらの論議の1つの欠点はそれらが.....としての神しか指し示していない点である。
- g これらは神の存在に対する証明でなく，.....である。

思考の刺激：あなたは宇宙の存在理由と宇宙の秩序を認めますか。あるいは、生命の発生と成長における偶然説は統計的に支持しがたいと言っている生物数学者に反対しますか。

- 3 神の存在のア・プリオリ論議についての言葉を完成しなさい。空欄にあなただけの答えを書き入れなさい。
- a 本体論的論議は最初 によって述べられた。
 - b 思索する人にとって、神は である。
 - c 神の観念は であるとも論じられることがある。
 - d 神の信仰の普遍性は、信仰が であることを示している。
 - e 対照的に人間は である神の存在を認識する。

思考の刺激：あなたの地域社会において、どういうものが合理主義への不満と「依存感」への回帰を（いかにまちがって教えられようとも）示していますか。（ESP——超能力、麻薬経験、占星術、オカルトの流行を考えればよいでしょう）

- 4 以下の叙述のうち、どれが価値論からの論議と調和しますか。正しい叙述に相当するものを○で囲みなさい。
- a) すべての人には生まれながらにして善悪の感覚がある。
 - b) 人生に意味があれば、人は悲惨にも金持ちにもなりうる。
 - c) 良心は神の存在を律法の賦与者として認識する。
 - d) 美の普遍的感覚は設計者・創造者の存在を暗示する。
 - e) 芸術家は審美感が鋭いので非常に宗教的である。
 - f) 「美は真実であり、真実は美である。これが地上で汝が知るすべてであり、汝が知る必要のあるすべてである」（ジョン・キーツ）。
 - g) カントは価値論を土台に論議を体系化した。

思考の刺激：あなたは（道徳的、美的）価値からの論議を、これまでの論

議以上に多少なりとも有効であると思いますか。あなたの人生にこれらの価値はどれほど基本的なものでしょうか。

5 知識の種類とボイドによってあげられている名称と示唆されている関係をつなぎなさい。空白に適切な名称と関係を下記から選んでその番号を書き入れなさい。

a + 知識 (人格との出会いによる)

b + 知識 (公理から創造されるもの)

c + 知識 (データの観察による)

- 1) 数学的 2) 科学的 3) 人格的 4) われと汝 5) われとそれ
6) われとそれ以外の何ものでもないもの

思考の刺激：人格としての神観念は創造的力（それ）としての神よりあなたに意味がありますか。人格的な神は神の被造物の知的存在にご自身を知らせたいと願っているとあなたは考えますか。

自己採点復習解答

- 1 a 2)
b 3)
c 1)
d 2) と 3)
e 1) と 2)
f 1)
g 3)
- 2 a アクイナス
b 第1運動者・原則
c 宇宙論的
d 完全な基準
e 目的論的
f 創造者・第1原因
g 指示
- 3 a 聖アンセルムス
b 考えうる最も偉大な存在
c 生来のもの
d 直観的
e 無限
- 4 a), c), d), g)
- 5 a 3) + 4)
b 1) + 6)
c 2) + 5)

- a カミュ (1913-1960) とサルトル (1905-1980) は、両者ともフランス人で最もよく知れわたった現代の実存主義哲学者である。2人の著書は現代の思想に多大の影響を与えた。
- b アリストテレス (B.C. 384-322) はギリシャ人でプラトンの弟子。彼の時代に知られていたほとんどすべての科学について書いたと言われる。
- c 私は聖アンセルムスに対する反論を知っている。彼の本体論的証明は最初アンセルムスと同時代人の僧グアニコによって攻撃された。彼は「愚者のために」この論議を非難した。トマス・アクイナス (1225-1274) はその証明を否定した。ダンス・スコタス (1265-1308) はそれを言い直した。レーネ・デカルト (1596-1650) はそれを再確認した。ゴットフリート・ヴォン・ライブニッツ (1646-1716) はそれを修正した。インマヌエル・カント (1724-1804) は反論した。ジョージ・ヘーゲル (1770-1831) は改造し、再確認した。ほとんどの現代哲学者はカントによる批判が決定的であると考えている。しかし、最近、アメリカの哲学者V・マルコムとC・ハートショーンによってそれは再生されてきた。神の存在は論理的に必要な論理的に不可能かのいずれかである、と彼らは言う。論理的に不可能であるとは証明されてこなかったもので、それは従って論理的に必要なものである。にもかかわらず、私の目的は決定的な証拠を示すことではなく、単に神への指示としての本体論的論議を提示するにある。(聖アンセルムスへの反論の要約はフリーマントルP.88によってあげられている。)
- d アクイナスとアンセルムスの実際のテキストの翻訳については、ビエールマンとゴウルドの「新世代の哲学」54—55章を参照のこと。
- e ハロルド・H・テトスの「哲学の問題点」P.542によると、ニヒリズムは通常以下の社会的教義に言及する。すなわち、社会状態があまりにも悪いので現在の社会秩序は、より良い何かの余地をつくるために一掃されるべきか破壊されるべきである。
- f 使徒パウロもローマ人への手紙の中で、この基本的論議を用いたことをここで注目するのも興味深い (ローマ1:19, 32, 2:14—16を参照のこと)。
- g C・S・ルイスは、不可知論からキリスト教に転向した英国の作家であり教授であった。彼はキリスト教に関する著書で有名である。
- h カール・グスタフ・ユングはスイスの心理学者、福音派の牧師の子であった。彼はフロイトから多大の影響を受けており、心理学に新しい共通用語「内向」と「外向」を導入した。

- i ヴィクトル・E・フランクル「人間の意味探究」(ニューヨーク, ワシントン, スクウエ社, 1963)。ロゴセラピーという用語は、意味をあらわすギリシャ語のロゴスから来ている。ロゴセラピーは「人間の意味探究と同時に人間の存在の意味に焦点を合わせる」。フランクル博士によると、「何とかして人生の意味を発見しようとする努力は、人間の中に動機づけを与える主な力である」。サイコセラピスト(精神療法医)として、彼は精神分析によって行われている過去を強調することよりも、未来を指し示すためにロゴセラピーを用いている。患者は人生の意味に直面し、それに向かって再度方向づけられる。
- j 確かに、これらすべての論議には批判の余地がある。私はこれらの論議は「水ももらさない」完全なものであると思っていない。しかし、これらの項目には、神の实在を説得力をもって指し示す集合的な力がある。
- k カッセルズは、ドイツの神学者ポール・ティリッヒ(1886-1965)がつくった用語を用いている。
- l オーストリアのユダヤ人哲学者マルチン・ブーバー(1878-1965)が、最初に「われと汝」「われとそれ」という対話用語を作り出した。この主題に関する彼の本は、初期の草稿では1919年の秋の日付けになっているが、実際に「われと汝」という題で出版されたのは1923年であった。
- それ以来、上記に引用したロバート・ボイド博士を始めとする多くのキリスト教思想家たちは、イエス・キリストとの人格的出会いを説明するのに「われと汝」という用語を用いてきた。しかし、ユダヤ人であったブーバーは、「汝」をキリストではなく神ご自身と考えた。この学習では、この用語は人とイエスとの出会いを論じるために用いられている。
- おそらくブーバーのドイツ語作品の最善の英訳は、ウォルター・カウフマン「われと汝」ニューヨーク, チャールズ・スクリブナーズ・サンズ, 1970であろう。